



第30号
(March)
2020年3月

フレンドシップス

FRIENDSHIPS



モンゴルの青少年による着物体験

奈良市国際交流協会



奈良市国際交流協会名誉会長
奈良市長 仲川 げん

春暖の候、会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。平素は、奈良市政並びに国際交流事業に多大なるご理解ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

本年は、奈良市と韓国の慶州市が姉妹都市提携を締結して50周年という大きな節目を迎えます。1970年4月15日に姉妹都市提携を締結して以来、スポーツ交流、学校交流、民間団体同士の文化交流など、多分野にわたる交流を通じて慶州市との絆を育てまいりました。

また、本年は奈良市と中国の揚州市が友好都市提携を締結して10周年という記念すべき年でもあります。唐招提寺を建立した鑑真大和上の故郷が揚州市であり、2010年5月23日に友好都市提携を締結して以来、唐招提寺と揚州大明寺の交流をはじめ、様々な形で交流の歴史を積み重ねてまいりました。

これを機に、それぞれの交流の歩みを振り返り、互いの絆をさらに深めるとともに、3市のさらなる発展のために今後も交流を続けてまいりたいと存じます。

特に本年は、オリンピック・パラリンピック東京大会が開催されることで、日本は世界中から注目を集めることになり、外国人観光客だけでなく、留学生を含む在留外国人も増加することが予想されます。多様な文化を持つ人たちが共存することで、地域社会がより豊かになる一方、文化の違いから摩擦が生じることも懸念されます。

異なる宗教や文化的背景を持つ方々と交流するうえで最も大切なことは、「相手を知りたい、理解したい」という気持ちで接することだと私は思います。相手の文化や宗教について理解することは、相手に対する敬意を示すことでもあります。互いを尊重し合い、理解する気持ちを持つことで、国籍を問わず誰もが過ごしやすい地域の実現に繋がるのではないのでしょうか。

「国際文化観光都市」として多様性を尊重し、理解し合える都市を目指すとともに、本市の文化財や世界遺産、観光資源などの魅力を発信することで、国際交流の大きな役割を果たしていきたいと存じます。

最後になりますが、会員の皆様におかれましては、奈良市国際交流協会と奈良市のさらなる発展のため、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますとともに、今後ますますのご健勝とご多幸を祈念してご挨拶といたします。

奈良市国際交流協会会員の皆さまへ



奈良市国際交流協会
会長 河野 良文

奈良公園の木々の芽も吹き始め、古都奈良にも春が訪れました。会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

昨年、5月1日に元号が「平成」から「令和」となり、時代は大きな区切りを迎え、私たちは新たな時代への第一歩を踏み出しました。

私たちが歩んできた平成という時代を振り返りますと、好景気に沸いた、いわゆる"バブル景気"とその崩壊、東日本大震災などの大規模な自然災害の発生、人口減少・高齢化社会への突入、インターネットやスマートフォン、AI等の新技術の急速な普及など、人々の営みや価値観が大きく変化した、激動の30年でありました。

昨年9月、令和に入りまもなく開幕したラグビーワールドカップでは、日本チームが史上初めてのベスト8入りを果たし、その活躍が私たちに大きな感動と勇気を与えてくれたことは記憶に新しいことと思います。大会を通し数々の名場面が生まれましたが、中でも、試合後に海外チームの選手たちが一列に並んでスタジアムの四方に深々とお辞儀をするシーンは特に印象に残っています。

日本には、相手を思いやり、相手の心に寄り添う文化があり、「お辞儀」は日本社会に深く根差した慣習の1つであります。海外ではあまりなじみのない「お辞儀」ですが、感謝の気持ちを伝える手段として海外の選手に受け入れられたことを大変喜ばしく思うと同時に、他国の文化や慣習を尊重し寄り添う姿勢は、私たち日本人も見習わなければなりません。

本年は、いよいよ東京で夏季オリンピック・パラリンピックが開催されます。ラグビーワールドカップで示した大規模なスポーツの国際大会が持つ力の可能性をお手本に、「他者を思いやる交流」が育まれることを願ってやみません。

また本年は、友好・姉妹都市提携を結んでから、韓国慶州市と50年、中国揚州市と10年という節目の年であります。これまで幅広い分野における多様な交流を行ってまいりました。しかし、日本と両国との政治や経済から見た関係性は、良好とは言い難いものがあります。そういった軋轢がある時代だからこそ、一人一人が異文化間の相互理解を深める努力が重要なのだと考えます。「ローマは一日にして成らず」とうたわれますように、長年の時をかけて努力し、積み重ね、作り上げることが大切であります。皆様がこれまで紡がれてきた国際交流の絆を大切に継続し、新たな交流の輪を広げていくことで、地域社会の国際理解は着実に進展するものと確信しております。今後も引き続き会員の皆様におかれましては、お力添えいただきますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

結びに、当協会の活動が世界各国の都市との友好交流の一助となり、世界的な友好の輪が広がっていくことを心から念願いたしますとともに、会員の皆様のご活躍とご健勝を祈念いたしまして、挨拶といたします。

第20回 日本語スピーチコンテストに寄せて

日本語スピーチコンテストは第20回がこの7月に行われました。今や定着した年中行事と言えるでしょう。それでも毎年、出演者が何人か判るまでは気がもめます。出演者は皆さんそれぞれに学習やテストの準備などで忙しい日程の中で、都合をつけて出演して下さる、実に有難く嬉しいことです。今回は6名が出演して下さい、大賞は「私の家出」石 鈺然さん、優秀賞「日帰り旅行」李 樂天さん、ほかの入賞者が決まりました。

続く奈良県在住の中国帰国者代表の日本語スピーチで、帰国以来の日本語研鑽の成果が披露され、感銘深い会でありました。先の大戦が終わり、満州国居住の日本人が窮地に陥った時、赤ん坊であった中国帰国者を預かり「自分の子」として育ててくれた中国農民の皆さんの、やさしい行為に心から感謝と敬意を捧げます。

言葉は大切な相互理解の手段です。若い人たちが積極的に外国語を学習し留学して、外国の文化に接して見聞を広め、現地の人々と友達になって欲しいと願います。それで得る成果の大きさは測り知れないでしょう。外国からの留学生もまた、日本を知り日本人と友好を深める留学ですから、大切にもてなすことが国際親善の実践と考えます。

戦争の自動化が進み、いまは科学者とオペレーターが主役の、無人リモコン戦争時代です。軍隊は役に立たず。私たちが何時ミサイルで消されるか知れない時代に、生き残るには完ぺきな平和と友好を実現するしかないと思います。そのために最も有効なのが外国の人と友人になることと確信し、やさしい心は世界平和に必要な美德と考えます。

日本国憲法の第九条「軍隊を保有しない」は、覚悟がいるけれど、世界をリードする優れた条項であると考えます。

「寄稿者：奈良市日本中国友好協会」



奨励賞「日本に来て思ったこと」熊 倩さん



優秀賞「日帰り旅行」李 樂天さん



大賞「私の家出」石 鈺然さん



スピーチコンテスト終了後の集合写真

モンゴル留学生受け入れプロジェクト

「モンゴル・奈良青少年交流プロジェクト」は奈良ゾンタクラブとウランバートルゾンタクラブ、奈良市国際交流協会モンゴル部会が共催で実施している事業で、今年は10年目にあたります。これまで4回の受け入れと派遣3回（来夏4回目の派遣を予定）で合計35名の若者たちが両国を訪問し異文化を経験したことになります。その間に誕生した大学生のゾンタクラブ「奈良大学ゴールデンZクラブ」の学生達も加わって、若者同士の交流が次第に定着しつつあります。

今回はウランバートルゾンタクラブが選出した5名の青少年（高校生2名・大学生3名）代表団たちは7月31日、関空に到着。

関空到着第一声は「日本は暑いね～～」。モンゴルは海から数百キロ離れた内陸部にあり、昼は日本と同程度の高温になるものの、夜間はストーブが必要になる位の冷え込み、又緯度と標高が高いので湿度が低く爽やか。奈良は、36度超えの高温多湿で不快指数最高潮の毎日でしたが、どん欲にすべてのプログラムを楽しんでくれました。

到着翌日は駆けつけて下さった仲川市長のご臨席も得て盛大な歓迎会となりました。モンゴル衣装を着て、モンゴルの歌を披露。ホームーのBGMが流れる中、43名の参加者に一名ずつモンゴル土産を手渡し、和やかな国際交流のひと時となりました。

折り紙・書道・金魚すくい・さをり織・浴衣でティーセレモニーなど日本文化の体験から市内観光、京都水族館やABC放送局訪問、奈良大学で学長のお話、ゴールデンZメンバーとの交流などで日本の大学生のキャンパスライフも体験。

草原の国からの初々しい青年達には日本はどのように映ったのでしょうか、次の時代を担う若者達の貴重な経験となり両国の交流の架け橋となる事を願うばかりです。

「寄稿者：モンゴル部会」



奈良大学で授業体験



初めての柱くぐり



日本文化体験



副市長表敬訪問

日本トスティ歌曲コンクール2019 ～ “言葉のいのち” と美しい音がおりになす歌曲のコンクール～

日本トスティ歌曲コンクールは、イタリアのトスティ歌曲コンクールの予選大会として2003年に始まりました。2000年を超える歴史を有し、素晴らしい文化を育んできた日本とイタリアが交流することで、両国の友好親善が充実してまいりました。秋篠音楽堂（奈良市西大寺 ならファミリー）に於いて、日本トスティ協会（NPO法人奈良芸能文化協会）主催、Istituto Nazionale Tostiano（イタリアトスティ協会）の共催のもと、トスティ歌曲と日本歌曲を歌い、“言葉のいのち”と美しい音がおりになす歌曲の魅力を追求しています。更に、心豊かな国際人として活躍できる若い芸術家を育成し、未来の希望となることを祈念して、開催しています。

北は北海道から南は沖縄まで全国73名の応募があり、8月3、4日に東京と8月17、18日に奈良の両会場で1次審査を行い、10月12、13日に2次審査、14日に最終審査を秋篠音楽堂で開催しました。最終審査では、勝ち残った10名が、素晴らしい歌を披露しました。

イタリアトスティ協会から、イタリア人2名の審査委員も加わり、日本の音楽界を代表する多数の審査委員が審査を行いました。山口佳恵子審査委員長は、「心ときめく、歌唱力は順位を決めることが難しい、とてもレベルの高いコンクールとなりました。日本トスティ協会は、皆さんをこれからも応援していきたい」と講評を述べました。会場いっぱいの聴衆も美しい歌声に、大きな拍手を送りました。

優勝した濱松孝行さん（テノール）は、「このコンクールをばねに、世界で活躍できる歌手になりたい。」と抱負を語りました。

今まで取り組んできました日伊文化国際交流の功績に対して、ルイーダ・ディオダート在大阪イタリア総領事から特別賞としてイタリア総領事賞が1位の濱松さんに授与されました。

世界の舞台への第一歩を目指して奈良に集まる若者達にとって奈良の文化や歴史に触れ、素晴らしいコンクールとなりました。

【寄稿者：日本トスティ協会】



1位 濱松孝行さん（テノール）



表彰式・フィナーレ

キムチ漬け教室

2020年1月に『キムチ漬け教室』を開催しました。前回の講座で、受講者から「白菜の塩漬け」も習いたいという希望があり、韓国人講師からも協力を得られたため、塩漬けとキムチ漬けの2日間で開催しました。

前日の18日午前に、春日中学校夜間学級の協力を得て、同校調理室で、総参加者35名のうちの25名が「白菜の塩漬け」を学びました。参加者のキムチに対する関心の深さに驚きました。

当日の19日は、キムチを漬ける前に、前日に塩漬けした白菜の塩抜きをしなければならなかったのですが、早朝にもかかわらず、6名の参加者がお手伝いくださり、準備が整いました。奈良市生涯学習センタークッキングルームにて、午前19名、午後16名が参加しキムチ漬け教室を実施しました。韓国の伝統食品であるキムチは、すでに日本の食卓にも定着しています。講師からキムチのいろいろな漬け方や調味料についての話があり、白菜以外にも大根・にんにく・しょうが・ニラ・タマネギなどの材料が含まれるとの説明に、参加者から驚きの声があがりました。

今回は、白菜塩漬けの段階から手作りでキムチを作ることができたので、多くの参加者から大変好評を得ることができました。おひとり2～2.5kgと、たくさんお持ち帰りいただきました。

また、昨年には、「しみんだより」の募集記事を見たという市民の方や奈良市聴覚障害者協会の皆様から、奈良市を通じて、講師を紹介してほしいという依頼がありました。そして奈良市内の自治会集会所（2019年2月2、3日）と奈良市総合福祉センター（2019年12月17、18日）で、キムチ漬け教室を開催し、同センターでは手話も交えながら行いました。韓国の食文化に触れる良い機会になったと思っております。2020年度は、今回の参加者の希望をふまえ、教室の種類、開催回数、および開催方法について検討し、より楽しく充実した『教室』を開催する予定です。興味・関心のある方は、ぜひともご参加ください。

「寄稿者：慶州部会」



講師の説明を熱心に聞く参加者の方たち



塩漬けした白菜と大根



唐辛子、ニンニク、ニラなどを混ぜて作った菜味



皆で協力し合い楽しく作業

令和元年度 奈良市国際交流協会 総会

～総会では毎回国際交流にまつわる講演を実施しており、今回は「多様性の国 マレーシアでの学び」をテーマに、同志社大学 グローバル地域文化学科 アジア・太平洋コース専攻の黒川麻美さんにご講演いただきました～

私は2018年の9月から約半年間、トビタテ！留学JAPAN地域人材コースの学生としてシンガポールとマレーシアに留学しました。私が生まれ育った奈良市と東南アジアからの訪日ムスリム観光客を繋いで、もっとたくさんの方々に奈良市を知ってもらいたい、好きになってもらいたいと思い、この留学を決めました。留学期間中は、旅行会社でインターンシップ生として働き、現地の声を拾いながらツアー造成を行ったり、聞き取り調査やアンケートを通して学びを深めたりしました。

私が過ごしたマレーシアはマレー系、中華系、インド系といった様々な文化を持つ人が暮らしており、食や宗教、季節行事の文化など多様性を感じる毎日でした。当初私は、異なる文化に入り込むことが出来ず苦労しましたが、最終的には“文化を知り、考えてみる”ことの大切さを学ぶこと



モスクの見学に行ってきました

ができました。相手の全てを吸収して受け入れることはなかなかできません。しかし、まず自らが相手に興味を持つことから始めることで、お互いの距離が少しずつ縮まり徐々に心地良くなっていくものだと思います。

これから先、オリンピックを軸に国際化が進むにつれ、奈良市にもよりたくさんの観光客が訪れることで、私たちが知らなかった文化と触れる機会も増えることと思います。その時に“知らない”“分からない”で終わるのではなく、まずは興味を持つことで、私達自身そして奈良市の国際化に一步繋がるのではないかと考えております。



インターンシップ先の旅行会社メンバーと私

2019年4月13日～6月2日

奈良市とキャンベラ 交流の軌跡～未来へ

奈良県立美術館が実施する「ヨルク・シュマイサー 終わりなき旅」の展示に関連して、作家が奈良市とキャンベラにゆかりが深いことから、両市に関する連携展示「奈良市とキャンベラ 交流の軌跡～未来へ」を開催しました。

キャンベラの概要や姉妹都市提携を結んだ経緯、交流のあゆみ、両市の魅力等をパネルを使って紹介し、キャンベラから贈られた50を超える伝統工芸等の展示も行いました。また、平成30年10月26日に姉妹都市提携25周年を迎え、お互いの市を往来するなど25周年を一緒にお祝いした様子も写真を使って紹介し、訪れた方々も興味深げに鑑賞していました。1か月半の展示期間を通し、約1万2千人の方にお越しいただき、姉妹都市キャンベラとの交流の歴史について市民の皆さまに知っていただく機会となりました。

これまでキャンベラとの間で深めてきた関係を大事にしながら、教育交流、文化交流、産業交流などの幅広い分野で、今まで以上に交流を深めていきたいと思っております。

